日本キリスト教会　広島長束教会だより

ミニバラ No.40

〒731-0135　広島市安佐南区長束 3-32-16

TEL/FAX
082-238-3459

2013 年 5 月発行

神の御子イエスの少年時代

「それから、イエスは一緒に下って行き、ナザレに帰り、両親に仕えてお暮らしになった。」　（ルカによる福音書 2 章 51 節）

聖書は、神が人間になられたのがイエス・キリストであると教えています。この方はおよそ 30 歳のときに伝道を始められ、3 年後に十字架上で亡くなられました。では、30 歳になる前はどんなお方だったのでしょうか。

これは多くの人の興味をそそる問題で、イエス様がインドに行ってバラモンから信仰の奥義を授けられた等という話もありますが、それらは人間の空想が産み出したものに過ぎません。というのは、イエス様が故郷のナザレで初めて伝道された時、そこにいた人たちが驚いたことが聖書に書いてあるからです。郷里の人たちは、自分たちと同じ普通の人間だと思っていた大工イエスにどうしてこんな素晴らしい話が出来るのか、と思ったのです。

伝道のたたかいに立つ前のイエス様は、人々の目には普通の人と何も変わりませんでした。しかし、だからと言って、イエス様の心の中まで普通の人と変わらないということではありません。

この当時、ユダヤ人は毎年過越祭のときにエルサレムに巡礼をしていました。イエス様と父ヨセフ、母マリアもそこに参加しました。エルサレム神殿での礼拝は無事に終わりました。ところがナザレに帰る途中、両親はイエス様がいないことに気がつき、あわてて探し回って、三日ののちやっと見つけたのです。

このときイエス様は神殿の境内で学者たちの真ん中に座り、話を聞いたり質問したりしておられました。息子を見つけた両親が叱りつけると、イエス様は「どうしてわたしを捜したのですか。わたしが自分の父の家にいるのは当たり前だということを、知らなかったのですか」と答えられました。イエス様はこの神殿が自分の本当の父の家だと言われるのです。ご自分が神の子であると自覚しておられるから、神の子である自分が父の家、神殿にいるのは当たり前だ、ということになるのです。

イエス様の言葉を両親は理解出来ませんでしたが、私たちもそれに近いと思います。しかし、これは私たちが信じているのが人間イエスなのか、それとも神の子イエスなのかということに直結するたいへん大きな問題です。神の子が十字架にかけられたために私たちの罪が赦されるのでありまして、これが人間イエスだったら。十字架の意味が全く違ってしまうのです。

さて、イエス様がこのように神の子であられるなら、学者たちの真ん中に座って、話を聞いたり質問したりしておられるというのはたいへん不思議なのです。神の子なら、初めからすべてのことをご存じで、改めて勉強する必要などないのではないでしょうか。

イエス様は知恵に満ちたお方ですが、何も勉強しないのに初めから知恵がそなわっていたわけではありません。学者の間に座って勉強していく、そういう意味で、イエス様は苦労して知恵を身につけ、知恵を増してゆかれたお方なのです。私たちが、イエス様はいわば天才で、生まれつき何でも出来るお方だと考えてしまうとイエス様がわからなくなってしまうでしょう。神の子であられるお方でさえ人生の中で学ばれることがあったのです。

それではご自分が神の子であることを自覚されていたイエス様は、そのまま本当の父の家である神殿にとどまったでしょうか。そうではありませんね。ナザレに帰り、それ以後もずっと両親に誠実に仕え、ヨセフから大工の仕事を学びつつ成長して行かれたのです。それはまさしく私たち人間と共に歩む神の姿でありまして、この姿勢は十字架の死に至るまで続けられて行くのです。

イエス様でさえ人間としての成長をなさったのであるなら、まして私たちも信仰において成長してゆかなければなりません。少年イエスは神と人とに愛されました。私たちにも同じ恵みがありますように。

（2012 年 12 月 30 日の礼拝説教より）

牧師　井上　豊